

## 石川県草本植物図譜

古池 博<sup>1</sup>・高内 香<sup>2</sup> (描図)

### Illustrated Flora of Herbaceous Plants in Ishikawa, Japan

Hiroshi FURUIKE<sup>1</sup>・Kaori TAKAUCHI<sup>2</sup> (*delineator*)

(5)

ウバユリ

*Cardiocrinum cordatum* Makino

ユリ科 **Liliaceae**

日本列島には*Cardiocrinum* 属のうち、下記の2種が分布する。

*Cardiocrinum cordatum* Makino ウバユリ

*Cardiocrinum glehnii* Makino エゾウバユリ

石川県下では、能登半島を含めて、ウバユリの多様な形態（茎丈も約30cmから2mを超える）のものが分布しているが、図にはその代表例を示した。

典型的な形態のエゾウバユリは、石川県下ではごく少数で、分布は白山山系のブナ帯上部に限られる。標高が高い生育域の限界付近では、小型化する。舳倉島や七ツ島の諸島には、*Cardiocrinum* 属の分布は認められていない。なお、石川県を含む北陸地方では、ウバユリの植物体の壮大なものが、しばしば、和名から誤解されてオオウバユリと呼ばれていることがあるが、エゾウバユリとは、形態が異なる（後述）ので、注意を要する。

ウバユリは、屋久島を分布の西端とし、九州、四国、本州中央部（石川県以南（以西））と、付属する島嶼（対馬、淡路島、小豆島、伊豆大島など）から、標本が得られている。エゾウバユリは、北海

道、サハリン（北サハリンを含む）、国後島での分布が確認されており、それより北方からは報告されていない。なお、本種は本州中央部以北（以東）にも分布する。

エゾウバユリの和名をオホウバユリ（オオウバユリ）と改称したのは、牧野富太郎である。しかし、牧野は学名を変更せず、両者は別種であるとの主張を堅持した。別種であることを主張した研究者としては、ほかに正宗厳敬（1969）がおり、主に北海道産のものについて正宗の執筆に協力した館脇操も同意見であった（正宗、1969）。

内外の分類学者でエゾウバユリ（オオウバユリ）をウバユリの下位単位とする者は多い。現在、広く用いられている学名 *Cardiocrinum cordatum* Makino var. *glehnii* (F.Schmidt) H.Hara は、この見解に立つものである。

両種は共に茎の上部は花序となるが、花が1、2個のものがある。

牧野はエゾウバユリの区別点として、「其葉闊圓、其花少シク小形多数」（牧野、1954）と記している。形態上の区別点としては、茎身長などと同様

<sup>1</sup>石川県地域植物研究会，〒921-8062 石川県金沢市新保本2-14-1 <sup>1</sup>Association for Botanical Researches and Data Service in Ishikawa Prefecture, 2-14-1 Shinbohon, Kanazawa, Ishikawa 921-8062, Japan

<sup>2</sup>石川県立自然史資料館，〒920-1147 石川県金沢市銚子町リ441番地 <sup>2</sup>Ishikawa Museum of Natural History, Ri441, Choshi-machi, Kanazawa, Ishikawa 920-1147, Japan

に連続的で、画然さに欠けるところがある。より明確な区別点は、ウバユリでは花序に葉腋の花が未発達で終わる多数の苞（図1.c）を形成するが、エゾウバユリでは花が未発達の苞は形成されないか、稀、あるいはごく少数なことである。なお、このように花が発達しない場合に苞と呼ぶのは形式上不適切であるため、ここでは、これらの苞（苞片）を一括して総苞と呼び、各苞片を総苞片と称することにす

る。この形質については、ウバユリが花序のかなりの部分から総苞を分化させる過程（あるいは発育段階）を有する方向に進化したのに対して、エゾウバユリでは、この段階を分化しないで、苞の葉腋には、原則として花が発達するという性質を維持したということの意味する。

中国の湖南、湖北をはじめとして広く分布する *Cardiocrinum cathayanum* (E. H. Wilson) Stearn も、ウバユリと同様に、総苞片を有する。 *Cardiocrinum* 属としては、一花について一枚の苞を有することが、進化の上ではもともと原始的であったと考えられる。地球的規模での *Cardiocrinum* 属全体の進化傾向という観点からすれば、ウバユリは総苞の形成により、照葉樹林帯の環境への適応を進めたのに対して、エゾウバユリは生育期間が短縮する北方の環境への適応を、原始的形態の維持によって実現したのであろう（古池, 1987; 2017）。

西方の高地、ヒマラヤ地方や接続する中国雲南省などに分布し、多数の高出葉を有する *C. giganteum* (Wall.) Makino も、蕾ごとに苞を有するが、開花時

には枯死・脱落するので、開花時だけの観察では、苞がもともと存在しなかったかのように見える。本種の場合、苞の役割は開花までの花（蕾）の保護に限定されるが、広く花の発育過程における保護の役割が、本属における苞の始原的な機能かもしれない。

*Cardiocrinum* 属全体の分布・進化から見れば、日本列島は分化の中心のひとつで、多様性に富む。エゾウバユリについては壮大であることが特徴とされているが、私は1955年に北海道十勝地方（士幌町オサルシ丘陵）で、矮小で茎丈が80cm程度のものを採集している（ISKW141235）。また、岐阜県北部（奥飛騨安房峠付近）など本州中部の亜高山帯下縁で、特異な形態のものが生育するのを見たことがある。牧野日本植物図鑑改訂版に掲載されているウバユリの図（牧野, 1954 など）は、太平洋側の照葉樹林帯林縁に生育するタイプであるが、石川県下など見られるものは、これと比較して変異の幅が極めて大きい。また、九州中部では、独自の分布域を有し、花色が紅色で、葉の先端が顕著な形態のアカバナウバユリが知られている。園芸化もされているが、正式の学名は未だ付与されていないようである。

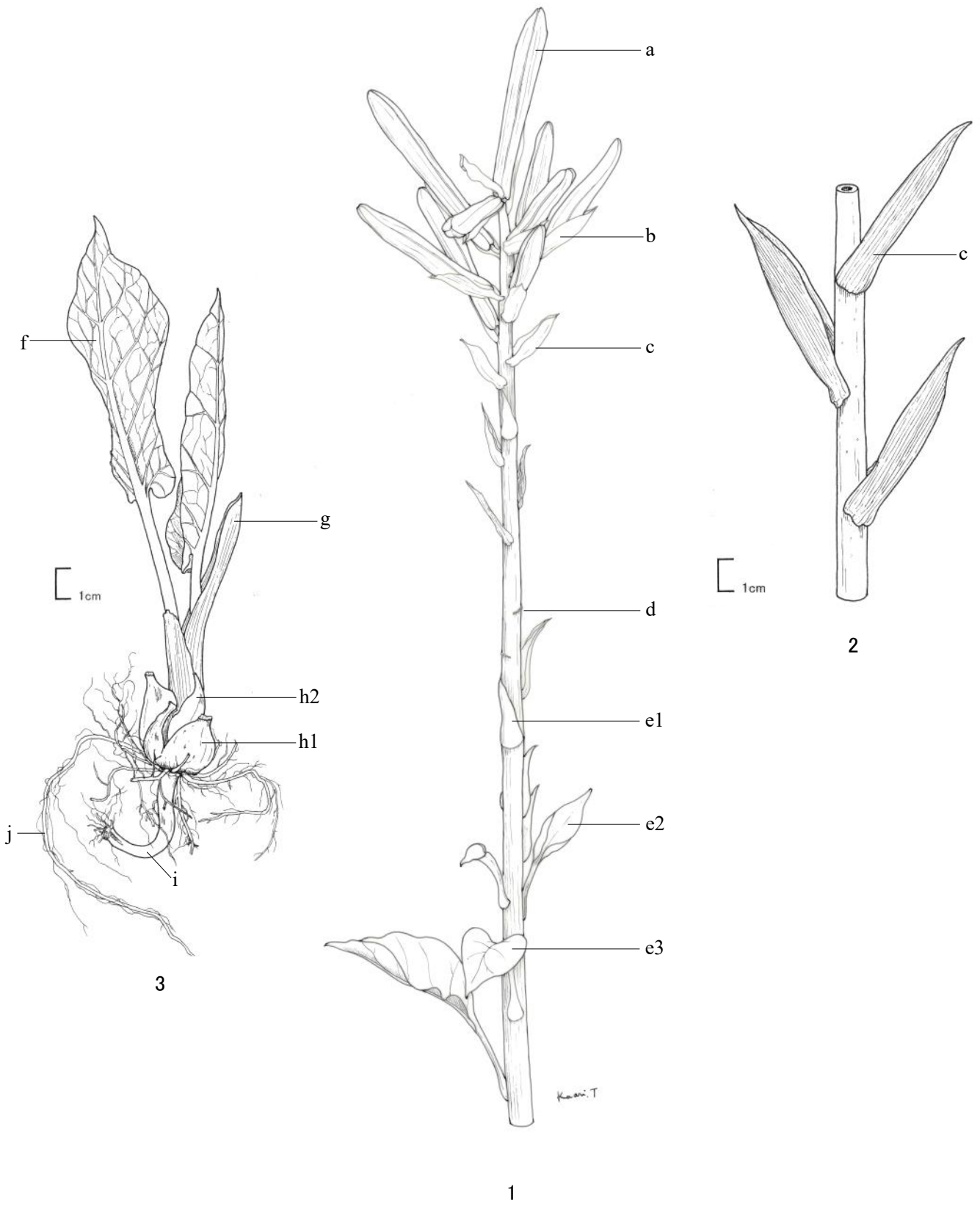
全国的には、長野県、福島県などからも、ウバユリとエゾウバユリの両種の分布が報告されていた。近年、従来、エゾウバユリのみが産するとされた地方から、ウバユリの分布についての知らせを見聞することがあり、気候変動がその要因に挙げられている。精査の必要があると思われる。

#### *Cardiocrinum cordatum* (Thumb.) Makino ウバユリ

1：地上部上部 upper part of acaulic stem (生品より描図：石川県立自然史資料館に隣接する灌漑用水土手の草地に生育、金沢市銚子町441番地 Native to bank-land of Ishikawa Museum of Natural history, Kanazawa-city, Ishikawa pref., Japan. 36° 31' 22" N, 136° 42' 21" E, alt. 92 m.) a. 蕾 flower bud just before flowering. b. 苞 bract (花が発達 flower develops). c. 苞 bract (花が不発達 flower undevelops). d. 苞の葉痕 leaf-scar of bract. e1. 高出葉 hysophyll, 葉身が退化. e2. e3 から e1 への移行形 intermediate style between e1 and e3. e3. 高出葉で葉身がやや退化し、葉柄が短くなっている。

2：総苞片を持つ花梗(茎上部＝花梗, 部分) upper part of stem (peduncle, part) with involucre scales c. 総苞片 involucre scale (bract)

3：芽吹きをする鱗茎 sprouting bulb (生品より描図：1 と同一の生育地から得られた若い植物体) f. 根出葉, 萌出直後の葉は赤い色素を持ち、葉緑素の緑色と混色して赤銅色に見える radicle leaf. g. 鱗茎内の幼植物を覆う鱗片葉で芽鱗の一種 bud scale. h1. 根出葉の葉柄上部が残存、肉質化して澱粉を蓄え、鱗茎葉化する base of radical leaf petiole changed to outer bulb scale. h2. 初生的な鱗片葉、葉柄下部が変化したものではない inner bulb scale originally developed. i. 地下茎(匍匐根茎), この鱗茎が推定2ないし3年前に親鱗茎から伸びた匍匐鱗茎先端の小鱗茎であることを示している underground stem (stoloniform rhizome). j. 根 root.



## 引用文献

- 古池博 (1987). ウバユリ属の苞の意義について. 植物地理・分類研究. 35: 107-111.
- 古池博 (2016). 新しい植物像の探求—*Cardiocrinum* 属の種分化と生活史. 植物地理・分類研究. 65: 53-67.
- 牧野富太郎 (1954). 牧野日本植物図鑑 (改訂版) 第21版. 北隆館, 東京, 1080 pp.
- 正宗巖敬 (1969). 日本の植物 第8巻 単子葉植物Ⅱ. 高陽書院, 東京, 295pp.